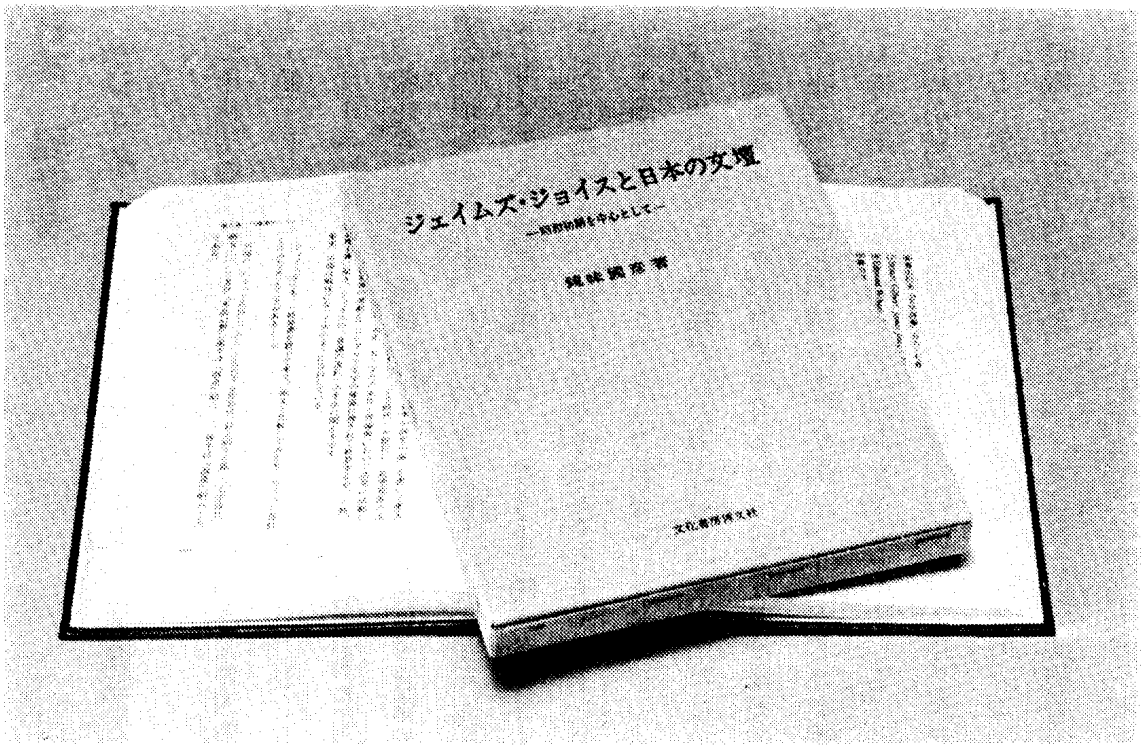
鏡味　國彦著
『ジェイムズ・ジョイスと日本の文壇』

長年待望の書物がとうとう出版された。第一次大戦はT・E・ヒューム、ルパート・ブルック、ウィルフレッド・オーエンのような若く、有能な文学者の生命を奪った。戦後ヨーロッパ全体に精神の荒廃が見られ、在来の価値観の崩壊があった。伝統に対する拭うことの出来ない懐疑が多くの人の胸に芽生えた。フロイトの精神分析学もこうした背景の下に、殊に小説の手法にそれまで考えられなかった傾向を与えた。このような新らしい文学の担い手がジョイスであった。鏡味教授の労作は、一九二二年にその大作『ユリシーズ』が発表されるや、たちまち欧米の文壇を席巻し、さらにわが国にも及んだジョイスが日本の作家たちにどのような影響を与えたかを主眼としている。たまたまわが立正大学文学部英文学科の同僚鈴木重吉教授のH・D・(ヒルダ・ドゥリトル)の『フロイトにささぐ』の精緻な翻訳が刊行され、ジョイスに決定的な影響を及ぼしたと考えられるフロイトに光を当てることになったことも意義が深い。ただフロイト自身は芸術活動一般の根源を無意識の世界に求めた人で、芸術そのものを体系的に論じてはいない。鈴木教授はフロイトとの出会いによるH・D・の自己観照をとり上げておられるが、彼女がイマジズム運動と運命を共にした過程を故ノーマン・ピアスン教授の研究の中に辿っておられる。このイマジズム運動と先に引き合いに出したT・E・ヒュームとの関連は、最近立正大学から文学博士号を獲得された高田美一教授の主論文《T・E・ヒューム「思索ノート」研究》にくわしく説かれている。

鏡味教授はまず大正期から昭和初期にかけてのジョイスの導入の過程をのべ、さらに伊藤整、永松定、春山行夫、川端康成、阿部知二、西脇順三郎といった文学者のジョイス受容のあり方を究明しておられる。その態度は客観的であり、妥当である。この著書が最近全国図書館協会選定図書となったことはよろこばしいニュースである。

(齋藤　襄治)

新　刊　紹　介